

例 (55.3%), D2 以上が 71 例 (44.7%) で, 術後化学療法施行例は 113 例 (71.1%) であった. 術後在院死亡率は 17.0%, 手術直接死亡率は 3.1% であった. 全症例の 50% 生存期間は 231 日で, Stage IV 胃癌非切除例の 63 日に比べ, 有意に長かった. また, 化学療法施行例では 275 日と非施行例の 164 日に比べ, 有意に延長がみられていた.

【結語】 Stage IV 胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の在院死亡率, 手術死亡率は高く, 適応決定には慎重を要する. 今後, 術前化学療法の有用性, さらに非切除化学療法との間で治療の優越性を比較検討する必要がある.

#### 18 食道扁平上皮癌に“いわゆる癌肉腫”を合併した 1 例

星野 芳史・河内 保之・熊木 大輔  
岡村 拓磨・佐藤 洋樹・渡邊 隆興  
西村 淳・新国 恵也

長岡中央総合病院消化器病センター

今回, 胸部中部食道癌に隣接した“いわゆる癌肉腫”を合併した症例を経験したので報告する. 症例は 50 代男性であり, 嚥下困難を初発症状として発症し, 近医を受診した. 上部消化管内視鏡検査にて胸部中部食道に表面平坦なほぼ全周性の腫瘍を指摘され, 当院内科に紹介され精査入院の結果, 生検にて中等度異型扁平上皮癌と一部肉腫様退形成を示す胸部中部食道癌の診断にて当科に転科となり, 胸腔鏡下食道切除, 再建術を施行した. 切除食道の標本の病理所見では扁平上皮癌に隣接する“いわゆる癌肉腫”を認めた. 手術所見では T2N3M0 で病期分類は stage III であった. 術後経過は良好であり, FP 療法による術後化学療法を 1 コール施行した後退院となった. 食道の癌肉腫は, “いわゆる癌肉腫”, 偽肉腫, 真性癌肉腫の三つに分類され, 比較的まれな疾患である. 今回の症例は肉眼的所見で 3 型を示す食道扁平上皮癌に隣接した 1 型の癌肉腫を認めた. 文献的考察を加えて報告する.

#### 19 70 歳以上の高齢者食道癌に対する根治的化学放射線療法後の Salvage 手術

牧野 成人・神田 達夫・小林 和明  
池田 義之・松木 淳・小杉 伸一  
大橋 学・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科

【目的】 高齢者にとって食道癌根治手術は非常に侵襲が高く, 切除可能であっても根治的化学放射線療法 (CRT) を選択することが多い. しかし癌の遺残, 再発をきたし, 結果的に Salvage 手術を希望する症例があり, 当科で経験した 3 例について全 Salvage 症例との比較も含めて報告する.

【対象】 当科における全 Salvage 手術 16 例中, 70 歳以上の 3 例が対象.

【結果】 3 例全例とも根治手術可能であったが, うち 2 例は高齢を理由に根治的 CRT を選択した. 全 Salvage 症例と比較し術後在院期間が長い傾向にあったが, 致命的な術後合併症はなく元気に退院した. 2 例で病理組織学的に剥離断端陽性 (R1) であった. 2 例は 15 および 22 ヶ月後に原病死, 1 例は 15 ヶ月後に他因死した.

【考察】 高齢者 Salvage 手術例は全 Salvage 手術例に比べ術後在院期間が長く, 組織学的剥離断端陽性 (R1) となる傾向にあるが, 生存期間の延長などが期待できる.

#### 20 切除不能大腸癌に対する抗癌剤を用いた時間治療の有効性

宗岡 克樹・白井 良夫\*・若井 俊文\*  
横山 直行\*・坂田 純\*・畠山 勝義\*  
新津医療センター病院外科  
新潟大学大学院消化器・一般外科  
学分野 (第一外科) \*

【目的】 抗癌剤の時間治療 (chronotherapy) では, 5-FU は午前 3 時頃, CPT-11 は午後 7 時頃, CDDP と 1-OHP は午後 4 時頃が至適投与時間とされる. 本研究では, 切除不能大腸癌に対する時間治療の有効性を検討する.

【方法】 切除不能な大腸癌術後再発の 30 症例を